P－Fスタディにおける不明確語の研究

――特に，青年用に見られるU反応の意味構造について――

藤　田　主　一

Ⅰ．はじめに

P－Fスタディ (Picture-Frustration Study) は，1945年，アメリカの Rosenzweig によって成人用が公刊されたが，当初は欲求不満研究のための査定用具を目的としていた。その後，アメリカはもとより，日本やドイツ，フランス，インドをはじめとする複数の文化圏で標準化されて今日にいたっている。心理診断として日本で使用される場合，P－Fスタディ（成人用，青年用，児童用）は，広く心理臨床の関係機関（精神病院関係，児童治療施設関係，家庭裁判所関係，児童相談関係，学生相談関係など）における頻度が高いといわれている[1)]。

P－Fスタディの標準法1場面1反応を実施するとき，被験者はいろいろなことを考えていると思われる。絵画刺激と言語刺激とを見くらべながら，各場面に投影された内的解決法を“そのまま回答する”“考えたからといって回答するとは限らない”“回答してみたいけれどもあえてしない”こともあるだろう。さらに，“こんな回答も考えていない？”と聞かれて“そうだ”と気づく場合もあろう。つまり，実験者側のヒントによって被験者の反応水準を引き出すこともできるのである。このような実施上の可能性は操作的な観点であるが，臨床的に見た場合，P－Fスタディの標準法1場面1反応を評点（スコアリング）する際に，その方法に困難を覚える状況によく遭遇する。P－Fスタディを実施する上で，反応語を語義的にスコアリングし解釈することが，最も重要なのはいうまでもない。

解説書（林ほか[2)]）の評点法の欄には，「被験者の反応語について，『たしかに言葉の上ではこう表現しているが，本当の気持ち（動機）はむしろこうではないか』と考え，『やはり言葉の上でのものよりも，その背景にある気持ちをとりあげて評点化すべきではないのか』という疑問ととまどいに対して，Rosenzweig の考え方は……(中略)……P－F反応の評点は被験者の用いた言葉の外見的，表出的意味 (semantic interpretation) にもとづいて行わなくてはならない……(中略)……つまり，スコアリングの段階では，被験者の言語的表現をあくまで語義的，顕型的

水準でとらえて分類組織に照合して客観的にスコアすることが原則である……(中略)……ある場面の反応語は，その裏にひそむ被験者の気持ちや動機を詮索してスコアし，ある場面の反応語については語義的にスコアするということになると，客観性が保持できないので注意することが必要である」という記述があり，評点因子の定義や評点因子の背景にある原理を忠実に適用することを求めている。しかし，解説書にある一般的な説明やスコアリング例（組み合わせ例を含む），また児童用・青年用・成人用ごとの注意事項や取り決めなどの記述を全面的に頼り，解説書を基礎として実施あるいは研究している臨床家にとっては，スコアリングの是非は致命的となることが多いのが現実である。

上述のように，語義的な立場で忠実にスコアリングすることはもちろんであるが，実際に診断を進めていく段階で，判断の難しい反応語に遭遇するケースも多い。このような判定の難しい反応を，仮に「不明確語」と定義すると，不明確語は，

（a） 反応自体が不明確な場合

（b） 動作や態度を主体に表現する場合

の２種類に大別できると思われる。こうした不明確な反応を，経験的な観点（主観的に判断する場合，回答した人をよく知っているので推測判断する場合など）から判定する試みもあるが，診断する側の合意に基づくことが多いのが現状ではないだろうか。

すでに成田[3]は，児童用を実施したときに頻出する不明確な反応語に対して，貴重な資料を提出している。そのなかで，「動作，例えば（泣く）（おこる）（お母さんにいってやる）といったように，なぜそうするのか意味のとりにくい反応を，我々は動作反応と名づけて資料を整理してみた……(中略)……実際には，テスターは『どうしてなの』と聞くことにより判定の資料を得ることになるのではなかろうか……(中略)……多くの場合で動作表現があらわれる被験者のケースについては，別の視点から充分検討する必要があるのではなかろうか。このことは，（わからない）（とりちがえ）の場合も同じで，このような反応が多く出る時には，そのケースの検討は別の視点から改めてすべきであろう」と述べている。

Ｐ－Ｆスタディの児童用に限らず，成人用や青年用でも，多数の人に実施していると種々の不明確語の出現に出合い，その判断に立ち往生してしまうことがある。単に“うん”“はい”“いいえ”“いいよ”などのみが記述されている場合には，いろいろな可能性が考えられる。それは許容なのか？，無視なのか？，否定や拒否なのか？である。例えば，児童用場面23「おつゆが冷めてしまって，悪かったね」に対して“いいよ”という反応は，言外の感情や語調を考慮しないと判定が難しい。従って，スコアリングする時には＜Ｉ′，ｉ，Ｍ′，Ｍ，ｍ＞のどれとも受け取ることができる。これらの不明確語に対して，解説書[2]ではＵ(unscorable)という記号を与えるか再度の質問を試みることを許容しているが，集団で実施して終了した場合には再質問は不可能に近いと思わなければいけない。

藤田[4,5]は，P－Fスタディの不明確な反応の中で，『なんで』という反応を取り上げて検討した。まず児童用を材料にして，各場面に『なんで』という反応語が想定されるかを小学生を対象に調査した。肯定と否定の観点から『なんで』反応の出現の可能性を集計すると，場面1，9，6，21，12，18の6場面が順に高い比率で肯定された。反対に，場面13，14，15，19，20，24，11，23，22，3の10場面は，この順に『なんで』と応答する可能性が有意に否定された。そこで，肯定された6場面の意味を求めるため，標準法に準拠してスコアリングを試みた。その結果，

（1）　場面1……E＝45.8%，E′＝25.6%，e＝22.1%，他責的＝93.0%

（2）　場面9……e＝45.8%，E＝34.7%，$\underline{E}$＝19.5%，他責的＝100%

（3）　場面6……E＝47.1%，e＝35.3%，$\underline{E}$＝10.3%，他責的＝92.7%

（4）　場面21……e＝54.4%，E＝44.1%，M＝1.5%，他責的＝98.5%

（5）　場面12……$\underline{E}$＝45.1%，E＝37.1%，e＝8.1%，I′＝8.1%，他責的＝90.3%

（6）　場面18……E＝46.7%，e＝21.0%，I′＝12.9%，M＝9.7%，他責的＝69.3%
　　無責的＝16.2%

という判定が得られた。例えば，場面18「お誕生日に呼んであげないわよ」という刺激語に『なんで』と反応した場合の意味は何だろうか。“なんで……呼んでくれないの”“なんで……いやだなア”“なんで……呼んでよ！”“なんで……意地悪だなア”“なんで……ひどい奴ダ”などが考えられるが，語義的にスコアリングするには材料が少なくて難しい。その子どもを熟知して＜E＞と判定できればよいが，上記の結果を見るとそうでない場合も存在するので，今後，検討の余地が残されている。

一方，成人用の『なんで』反応については，大学生の男女を対象に調査した。得られた結果の主なものを略記すると以下のとおりである。

（1）　P－Fスタディ成人用において，『なんで』反応に「肯定」の可能性が確認された。

（2）　P－Fスタディ成人用において，男子に『なんで』反応に対する「肯定」率が高かった場面（80%以上）は，場面10を筆頭に，場面7，場面13，場面8，場面9などであった。

（3）　P－Fスタディ成人用において，男子に最も『なんで』反応に対する「否定」率が高かった場面は，場面18であった。

（4）　P－Fスタディ成人用において，女子に『なんで』反応に対する「肯定」率が高かった場面（80%以上）は，場面10と場面8を筆頭に，場面7，場面13，場面9などであった。

（5）　P－Fスタディ成人用において，女子に最も『なんで』反応に対する「否定」率が高かった場面は，場面22であった。

（6）　P－Fスタディ成人用において，『なんで』反応に対するスコアリング（評点因子）を試みると，男女とも，E′，E，$\underline{E}$，eという他責的なアグレッションの方向が多いのが特徴的であった。

これに対して，秦[6]は著書『Ｐ－Ｆスタディの理論と実際』の中で，「藤田はＰ－Ｆスタディ児童用で『なんで？』という反応の出現しやすい場面と反応の意味について研究している。その結果によると，この反応は場面によって異なるが，Ｅやｅと判定されることが多いと報告されている。しかし，この場面と類似したフラストレーション場面のスコアを手引きで参照してみると，場面６『どうして遊んでくれないの？』や場面12『なぜそんなことをいうの？』が，いずれも当惑（Ｉ′）と相手に対する要求（ｅ）の組み合わせとして『Ｉ′//ｅ』とスコアされている。したがって，場面18の場合も『Ｉ′//ｅ』とするのが妥当ではないかと考えられる。もちろんこの場合も質問によって言語反応の意味を明確化できれば迷わずにすむことである」と述べ，スコアリングの際に実施者側が誤りをしないように提言するとともに，再質問を行うことで疑問点を解消するべきであると主張している。しかし，『なんで（？がつかないことが多い)』という反応語のみが記述してある場合に，それがすべて回答者側の「当惑＋要求」とは限らない事実は，上記の藤田[4,5]の結果が示している。スコアリングの誤りに対する秦[6]の指摘はもっともであり，Ｐ－Ｆスタディが語義的解釈に基づいて構成されていることは論を待たないが，言外に攻撃的な意味を含め語調を強めて『なんで！』という可能性も否定できないし，回答者（小学生，大学生）が示したＥ反応，他責的反応の多さに意味があるのではないだろうか。

児童用の再標準化（改訂）に着手した秦ら[7,8]の研究では，標準化の手続きに際して各場面に現れた「不明確語」は，Ｐ－Ｆスタディの原点にもどり，すべてスコアリング不能（Ｕと記号化）するという。被験者のＵ反応が一定数（３～４個？；この数値は未定）以下の場合は，残りの場面のスコアを集計して標準的に診断するが，一定数以上を記録した場合は，再検査等の別の方法を考慮しているというのである。そうなれば，Ｕ記号の量的・質的な意味が求められることになろう。いずれにしても，このテーマは今後ともＰ－Ｆスタディ実施上の本質とかかわるため，さらに研究が進められるものと思われる。

II．研究の目的

本研究では，Ｐ－Ｆスタディに現れた「不明確語」の中から，特に青年用解説書に記述されている場面ごとのＵ反応を取り上げ，次の諸点を確認することを目的とする。

（１）　青年用解説書に記述のあるＵ反応の場面を特定する。

（２）　Ｐ－Ｆスタディの原図版を使用し，Ｕ反応の言語刺激を加えた調査票を作成する。

（３）　大学生を被験者にＵ反応の意味について回答を求め，スコアリング上の資料を提出する。

（４）　特定されたＵ反応に一定の位置づけが可能かどうかを検討する。

以上の目的のもとに，以下に示す調査を実施した。調査の条件を除いては，すべてＰ－Ｆスタディの標準法に基づいて行われている。

Ⅲ。方　　法

1．被験者

本研究に参加した被験者は，東京都内の大学に通学する男子大学生118名である。調査実施時の平均年齢は19.9歳である。

2．調査材料

P－Fスタディ青年用の解説書（注意事項）には，スコアリングに際しての注意点や取り決めが記述されている。各場面の注意事項の中で示された不明確語を，以下に選択する。

【場面1】……なし

【場面2】……・U：「どうしてそんなことをしたの？」という反応は，相手が花瓶を割ったと場面と誤認しているので，質問によって新たな反応を得なければ評点することはできない。

・「どうしましょう」の反応については，アグレッションの方向はスコアせず（評点例の青年用場面2の「i」の④を参照のこと。「i－④」と記す。以下同様。），異方向はスコアする（I′//e－①）。

【場面3】……・U：「見るほどの価値があるかしら」の反応は，攻撃的な/E/が欲求不満を軽視したM′//かを質問によって確かめる必要がある。

・「そうなんです」「そうね」の反応は，同方向はスコアせず（/E/－②），異方向はスコアする（E′//m－②）。

【場面4】……・U：「こん畜生」という反応は，車を運転した人に対する反応（/E/）か，乗り遅れたことの失望（E′）かは，質問によらなければ不明であり，評点することはできない。

【場面5】……なし

【場面6】……・U：「そうですか」の反応について

この場面は被験者によって「規則によって2冊しか借りられない」という自我阻害場面を認知するか，「規則を知らなかった，または規則を破ろうとした」という超自我阻害場面と認知するものに分かれる。したがって「ああ，そうですか」は自我阻害のE′：M′//か超自我阻害のI′//かは質問によらなければきめられない。

・「すみません」は，同方向の組み合わせ反応はスコアしない（i－①）。異方向の組み合わせ反応はスコアする（/I/m－①）。

【場面７】……・Ｕについて

「これくらいでよしましょう」「君もそう思いますか」の反応はあいまいであるため，質問なしにスコアすることは出来ない。

客が先に言った言葉を記入した場合は場面の誤認である。

【場面８】……なし

【場面９】……なし

【場面10】……なし

【場面11】……・「無言」，「……」，「無言で切る」という反応について

相手に何の応答もせずに電話を切ることは相手に対する攻撃的反応と考えられるので/E/とする。

【場面12】……・Ｕについて

「同じ柄のスカーフだから」だけの反応ではM′//か/M/かが不明であり，評点することはできない。

【場面13】……なし

【場面14】……・Ｕについて

「時間（場所）を間違えたのかしら」は主体が自分達か（/Ｉ/），彼女か（/M/）を確かめる必要がある。

【場面15】……なし

【場面16】……・「どうしようもないわ」の反応は，相手に対する攻撃（/E/）か，事態に対する困惑（Ｉ′//）かは質問によらないとスコアできない。

・「無言」が，ショックで言葉が出ないことを示している場合はＩ′//となる。

【場面17】……なし

【場面18】……なし

【場面19】……・「無言」は，警官に対する敵意か（/E/），本人の当惑を示すのか（Ｉ′//）は質問によらなければスコアすることができない。

【場面20】……なし

【場面21】……なし

【場面22】……なし

【場面23】……・「わたしが電話に出よう」の反応は，これだけでは//ｉとスコアすることはできない。その電話の内容によってスコアが左右されるので質問が必要である。

【場面24】……なし

以上の24場面の中から，ここでは①明らかにＵ反応と想定している反応，②このままではスコ

アリングに無理がある反応を含む9場面を取り上げた。即ち，場面3，場面4，場面6，場面7，場面12，場面14，場面16，場面19，場面23である。それらの場面の絵画刺激と不明確語とをセットにした図版を作成した。調査用紙に示された質問は，以下のとおりである（**図1**に例示）。

図1　調査用紙の具体例（場面4）

【場面3】……『見るほどの価値があるかしら』

Q：どうして，こんな言い方をしたのでしょうか？

【場面4】……『こん畜生』

Q：誰に対して，どんな気持ちで「こん畜生」と言ったのでしょうか？

【場面6】……『そうですか』

Q：右側の人は，

「規則を知っていて，こう答えたのでしょうか？」

それとも，

「規則を知らなかったのでしょうか？」

どちらの気持ちでしょうか。

【場面7】……『これくらいでよしましょう』

Q：誰を指して言っているのでしょうか？

「ウエイトレス」に対して？

それとも，

「自分自身」について？

【場面12】……『同じ柄のスカーフだから』

Q：同じ柄のスカーフだから何だと言うのでしょうか？

【場面14】……『時間（場所）を間違えたのかしら』

Q：間違えたのは，

「自分達の方？」ですか。

それとも，

「彼女の方？」ですか。

【場面16】……『どうしようもないわ』

Q：どういう意味でしょうか？

【場面19】……『……（無言）』

Q：どうして「無言」なのでしょうか？

【場面23】……『私が電話に出よう』

Q：叔母さんと，電話で，どんなやりとりがあるのでしょうか？

3．手続き

調査は，教室単位で実施された。調査用紙が配布された後，以下の教示が与えられた。

「下に，9種類の場面（絵）があります。左側の人物の言葉を読んでください。右側の人物の答えだけでは，何か言いたいのかよくわかりません。

そこで，その言い方をとおして，右側の人は，本当は何が言いたかったのかを回答してください。思いついたことでよいですから，回答欄に自由に書いてください」

調査内容の趣旨が不徹底とも考えられたため，また回答の方法が一貫しない点を思慮し，具体例（青年用の例題）を用いて説明が加えられた。調査用紙を回収後，記述に不備がないかどうかを確認して集計を行った。

Ⅳ．結果と考察

1．P－Fスタディの基本的なスコアリングの方法について

P－Fスタディの標準法は，**表1**に示すとおりである。即ち，記述された各場面に対する反応語を，①アグレッションの方向(Directions of Aggression)，②アグレッションの型(Types of Aggression)という2次元のカテゴリーに分類する。さらに，アグレッションの方向は他責的(Extraggression，E－A)，自責的(Intraggression，I－A)，無責的（Imaggression，M－A）の3方向に，アグレッションの型は障害優位（Obstacle-Dominance，O－D)，自我防衛（Ego-Defense，E－D)，要求固執（Need-Persistence，N－P）の3型に分類される。これらの相互の組み合わせにより基本的には9種類の評点因子（Scoring factors：スコアリング）の成立が可能であり，24場面を通しての評点因子の出現頻度ならびにその特徴や反応転移などの推移から，

表1　評点因子一覧表[2)]

アグレッションの方向＼アグレッションの型		障害優位型（O－D）(Obstacle-Dominance)	自我防衛型（E－D）(Ego-Defense)(Etho-Defense)	要求固執型（N－P）(Need-Persistence)
他責的 (Extraggression)	E－A	E′(他責逡巡反応) (Extrapeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応。 「チェ！」「なんだつまらない！」といった欲求不満をきたしたことの失望や表明もこの反応語に含まれる。	E（他罰反応） (Extrapunitive) とがめ，敵意などが環境の中の人や物に直接向けられる反応。 E：これはE反応の変型であって，負わされた責めに対して，自分には責任がないと否認する反応。	e（他責固執反応） (Extrapersistive) 欲求不満の解決をはかるために他の人が何らかの行動をしてくれることを強く期待する反応。
自責的 (Intraggression)	I－A	I′(自責逡巡反応) (Intropeditive) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応。 多くの場合失望を外にあらわさず不満を抑えて表明しない。内にこもる形をとる。外からみると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。従って失望や不満を抱いていることを外にあらわさないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし，他の人に欲求不満をひき起させそのためにたいへん驚き当惑を示すような反応もこれに入る。	I（自罰反応） (Intropunitive) とがめや非難が自分自身に向けられ，自責・自己非難の形をとる反応。 I：これはI反応の変型であって，一応自分の罰は認めるが，避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くの場合言い訳の形をとる。	i（自責固執反応） (Intropersistive) 欲求不満の解決をはかるために自分自ら努力をしたり，あるいは，罪償感から賠償とか罪滅ぼしを申出たりする反応。
無責的 (Imaggression)	M－A	M′(無責逡巡反応) (Impeditive) 欲求不満をひき起こさせた障害の指摘は最小限度にとどめられ，時には障害の存在を否定するような反応。	M（無罰反応） (Impunitive) 欲求不満をひき起したことに対する非難を全く回避し，ある時にはその場面は不可避的なものと見なして欲求不満を起させた人物を許す反応。	m（無責固執反応） (Impersistive) 時の経過とか，普通に予期される事態や環境が欲求不満の解決をもたらすだろうといった期待が表現される反応。忍耐するとか，規則習慣に従うとかの形をとることが特徴的である。

その人のパーソナリティを浮き彫りにすることで，主観的な反応を客観的な標準へと導くことになる[2,6]。ここでは，このようなスコアリングの手続きに準じて不明確語の意味をとらえていこうとしているのである。

2. 場面ごとの不明確語の意味構造について

ここでは，P－Fスタディ青年用解説書に示されている不明確語の意味について，設定された各場面ごとにまとめておくことにする。

（1） 場面3の意味構造について

場面3は，『前の人の帽子がじゃまになって見えにくいでしょう？』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『見るほどの価値があるかしら』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書は，この反応が「攻撃的な/E/か，欲求不満を軽視したM′かを質問によって確かめる必要がある」という説明である。そこで，「どうして，こんな言い方をしたのでしょうか？」という設問を与えた。**表2**は，回答結果とその比率をまとめたものである。回答内容では，見ている映画（間接対象）に対する価値的な不満が「見るほどの価値があるの？」という反応語を引き出しているのであり，これは前の人（直接対象）への対人的な攻撃や非難よりも高率である。攻撃性（/E/）は映画（間接対象）に向けられ，欲求不満の軽視ではないように受け取られる。「見る価値の低い映画であるから，見るほどの価値がない」ということだろう。

表2　場面3『見るほどの価値があるかしら』に対する回答の比率（%）

映画に対する不満（感情的な拒否）	50.0
対人的な攻撃・非難・皮肉・イヤミ	28.8
逡巡反応	16.1
その他	5.1

（2） 場面4の意味構造について

場面4は，『せっかくお送りしたのに，車の故障で間に合わず，申しわけありません』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『こん畜生』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書は，この反応が「車を運転した人に対する反応（/E/）か，乗り遅れたことの失望（E′）かは，質問によらなければ不明であり，評点することはできない」という説明である。そこで，「誰に対して，どんな気持ちで『こん畜生』と言ったのでしょうか？」という設問を与えた。**表3**は，回答結果とその比率をまとめたものであ。回答内容では，車を運転した人（直接対象）への攻撃だけでなく，車や列車（間接対象）への攻撃も見られ，それらを合計すると全体の77.1%となる。乗り遅れたことへの失意（残念だ，もう少し早く出ればよかった）は

それほど高い比率ではない。したがって，これは対象への攻撃性の反応と考えられる。

表3　場面4『こん畜生』に対する回答の比率（%）

車に対する攻撃（どうしてこんな時に故障するんだ）	35.6
運転手に対する攻撃（きちんと整備しておけ）	27.1
自分に対する攻撃（もっと早く出ればよかった）	17.8
列車に対する攻撃（もう少し待ってろ）	14.4
その他	5.1

（3）　場面6の意味構造について

場面6は，『4冊持って来られても，図書館の規則では1回に2冊しか持ち出しを許されていないのですが……』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『そうですか』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書は，この反応が「規則によって2冊しか借りられないという自我阻害場面を認知するか，規則を知らなかった，または規則を破ろうとした超自我阻害場面と認知するものに分かれるので，『ああ，そうですか』は自我阻害のE′：M′//か超自我阻害のI′//かは質問によらなければきめられない」と説明している。そこで，「右側の人は規則を知っていたのでしょうか？，それとも，規則を知らなかったのでしょうか？」という設問を与えた。**表4**は，回答結果とその比率をまとめたものである。それを見ると，超自我阻害場面と認知（I′//）するほうが，自我阻害場面と認知（E′：M′//）するよりも高率であった。すなわち，『ああ，そうですか』は『ああ，そうだったのですか』という意味が強く，自責逡巡反応という可能性が高いものと思われる。

表4　場面6『そうですか』に対する回答の比率（%）

自我阻害場面と認知（規則を知っていた）	25.4
超自我阻害場面と認知（規則を知らなかった）	74.6

（4）　場面7の意味構造について

場面7は，『でもね，そんなにこまかいことまでいわなくてもいいじゃないですか？』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『これくらいでよしましょう』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書では，この反応が「あいまいであるため，質問なしにスコアすることは出来ない」と説明されている。そこで，「ウエイトレスと自分自身のどちらを指して言っているのでしょうか？」という設問を与えた。**表5**は，回答結果とその比率をまとめたものである。内容は二分される。第1は，『これくらいでよしましょう→では，これくらいでよしておこう』と解釈され，自分がウエイトレスに発言した攻撃的な内容からの回避反応と考えられる。第2は，『これくらいでよしましょう→ねえ，こんなことはお互いにやめましょう』と

解釈され，ウエイトレス（直接対象）への回避要求と受けとることができる。

表5　場面7『これくらいでよしましょう』に対する回答の比率（%）

自問自答している	55.1
ウエイトレスに向かい発言している	40.7
両者に平等な立場で発言している	4.2

（5）　場面12の意味構造について

場面12は，『このスカーフがあなたのものでないとすれば，彼女がまちがってもっていったにちがいありません』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『同じ柄のスカーフだから』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書は，「この反応だけではM′//か/M/かが不明であり，評点することはできない」と説明している。そこで，「同じ柄のスカーフだから何だと言うのでしょうか？」という設問を与えた。**表6**は，回答結果とその比率をまとめたものである。回答内容は，大きく2つに分類できる。第1は，『同じ柄のスカーフだから仕方がないことだ』という無罰反応（/M/）であり，第2は，取り違えた彼女（直接対象）の事実を指摘しながら，彼女に対して攻撃性の意味を加えるものである。他罰反応の意味合いが含まれると思われる。『これでよい』という無責逡巡反応（M′//）は3.4%にすぎない。

表6　場面12『同じ柄のスカーフだから』に対する回答の比率（%）

仕方がない・しょうがない	50.9
間違った事実（過失）の指摘や説明	41.5
これでよい	3.4
その他（自分がいけない）	4.2

（6）　場面14の意味構造について

場面14は，『彼女は10分前にここへ来ていなくてはならないんですが……』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『時間（場所）を間違えたのかしら』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書は，「間違えた主体が自分達か（/I/）か，彼女か（/M/）を確かめる必要がある」と説明している。そこで，「間違えたのは，自分達の方？，それとも彼女の方？」という設問を与えた。**表7**は，回答結果とその比率をまとめたものである。表からもわかるように，「彼女（直接対象）が間違えた」とするものが全体の74.6%で，「自分達が間違えた」とするものよりも高い比率を示している。したがって，攻撃性の方向は無罰反応（/M/）ではないかと考えられる。人間的な数値（待っている自分達＝2人，来ない彼女＝1人）から，多数の方

が正しいという判断が認められる。

表7　場面14『間違えたのは（自分達？）それとも（彼女？）』に対する回答の比率（%）

彼女が間違えた	74.6
自分達が間違えた	25.4

（7）　場面16の意味構造について

場面16は，『君が追い越そうとしたからだよ』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『どうしようもないわ』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書では，この反応は「相手に対する攻撃（/E/）か，事態に対する困惑（I′//）かは質問によらないとスコアできない」と説明されている。そこで，「どういう意味でしょうか？」という設問を与えた。**表8**は，回答結果とその比率をまとめたものである。表から，左側人物（直接対象）への過失や責任の追求が全体の54.3%，事故の事実（間接対象）への指摘が30.5%を占めることがわかる。これは他罰反応（/E/）であり，困惑である自責逡巡反応（I′//）とはいえない。

表8　場面16『どうしようもないわ』に対する回答の比率（%）

相手の過失，責任の追求	54.3
今更仕方ない（済んだことだ）	30.5
困惑（どうしよう）	5.9
自分の責任	5.9
その他	3.4

（8）　場面19の意味構造について

場面19は，『どこへ行くつもりですか？学校の前だというのに時速60キロも出して……』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『……（無言）』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書では，「無言は，警官に対する敵意（/E/）か，本人の当惑を示すのか（I′//）は質問によらなければスコアすることができない」と説明されている。そこで，「どうして無言なのでしょうか？」という設問を与えた。**表9**は，回答結果とその比率をまとめたものである。警官の指摘や注意（スピード違反を想定？）を受けて，右側人物はスピードの出し過ぎ（間接対象）を自覚し罪を認める自罰反応（/I/）が，全体の54.2%を占めて最も高率である。警官（直接対象）に対する敵意や怒りの他罰反応（/E/）は26.3%，右側人物の当惑（I′//）は

16.1%である。すなわち，警官にとがめられた場合には，素直に謝罪する気持ちが優先するはずであるという理解の仕方と思われる。

表9　場面19『……無言』に対する回答の比率（%）

スピードの出し過ぎを自覚・罪の肯定	54.2
警官への怒り・違反の否定	26.3
警官にとがめられたことへの動揺・緊張	16.1
その他	3.4

（9）　場面23の意味構造について

場面23は，『叔母さんからだよ。ここでもう一度お別れがしたいから，しばらく待っていてほしいといっているが……』という左側人物の言語刺激に対して，右側人物の『私が電話に出よう』という言語反応がU反応の具体例として設定されている。解説書では，「これだけでは，//ｉとスコアすることはできない。その電話の内容によってスコアが左右されるので質問が必要である」と説明されている。そこで，「叔母さんと，電話で，どんなやりとりがあるのでしょうか？」という設問を与えた。**表10**は，回答結果とその比率をまとめたものである。解説書は右側人物の行動が自責固執反応のかたち（自分から出向く）を取ることを前提にしているが，電話の内容はそのとおりにはならないようである。全体の44.9%は「電話での挨拶だけで，再会を断る」内容であり，「出発時間の強調」と「別れの挨拶だけ」を加えると，全体の70.4%は叔母さん（直接対象）との再会を拒否（他罰反応）するものである。「待っていると伝える，待っていると伝えてほしい」という他責固執反応（//ｅ）や無責固執反応（//m）は少ない。右側人物からの再会への積極的行動は認められていない。これは，解説書の想定と異なる点であると考えられる。

表10　場面23『私が電話に出よう』に対する回答の比率（%）

電話での挨拶だけにして，再会を断る	44.9
待っていると伝える	22.0
出発時間を強調する	15.3
別れの挨拶にとどめる	10.2
その他	7.6

V．要　約

本研究の目的は，P－Fスタディ青年用に現れる可能性がある不明確語について検討することであった。4年制大学の男子大学生118名を調査対象者に，P－Fスタディ青年用の場面の中から不明確語が設定されている9場面を選択し，不明確な反応を明確化する設問を試みた。選択された場面は，場面3，4，6，7，12，14，16，19，23である。それぞれに，場面の絵画刺激と左側人物の言語刺激（不明確語を挿入）を与え，その意味を再質問する方法を採用した。不明確語に対する得られた主要な結果は，以下に示すとおりである。

（1）　場面3：攻撃性は映画の質の悪さや対人的な動揺に向けられる。

（2）　場面4：攻撃性は車の故障，運転手の態度，自分のミス，列車の出発の順に向けられる。

（3）　場面6：場面認知は，超自我阻害場面（規則の否定）という判断である。

（4）　場面7：非難への攻撃性は，自分自身とウエイトレスとの両方へ向けられる。

（5）　場面12：攻撃性は無罰反応や他罰反応に集中し，無責逡巡反応はわずかである。

（6）　場面14：攻撃性は自分達よりも彼女に向かい，これは無罰反応と解釈される。

（7）　場面16：攻撃性は相手の運転方法や責任に向かい，困惑の逡巡反応は少ない。

（8）　場面19：攻撃性は自分自身のミスに向けられ，警官への怒りや責任回避が続く。

（9）　場面23：攻撃性は他責的な方向が強く，要求固執型は少ない。

以上の結果は，P－Fスタディを実施していくときに，不明確語が出現した場合の参考資料になるものと思われる。今後は，各場面の精緻化とU反応の性差について，さらに検討を加えていく予定である。

＜引用文献＞

1)　藤田主一：「心理学教科書に扱われたP－Fスタディの現状と課題――特に，教育心理学教科書を中心に――」．1991，城西大学女子短期大学部紀要，8，1，161-182.

2)　住田勝美・林　勝造・一谷　彊ほか：「P－Fスタディ解説――1987年版――」．三京房，1987.

3)　成田錠一：「乳幼児期における社会性の発達と指導」，学苑社，1980.

4)　藤田主一：「P－Fスタディに現われた不明確語の研究――特に『なんで』反応の意味と解釈について――」．1987，日本心理学会第51回大会発表論文集，575.

5)　藤田主一：「P－Fスタディにおける不明確語の研究――特に，成人用『なんで』反応の意味と解釈について――」．1997，城西大学女子短期大学部紀要，14，1，29-40.

6)　秦　一士：「P－Fスタディの理論と実際」．北大路書房，1993.

7)　秦　一士・津田浩一ほか：「日本版P－Fスタディ（児童用）の再標準化の研究（1）――現日本版の検討――」．1997，日本心理学会第61回大会発表論文集，57.

8)　津田浩一・秦　一士ほか：「日本版P－Fスタディ（児童用）の再標準化の研究（2）――図版と刺激文の改訂――」．1997，日本心理学会第61回大会発表論文集，58.